

祭り 芸能被災地に希望

文化が果たす役割考える

仙 台

東日本大震災などの被災地が復興していく過程で、祭りや伝統芸能が果たす役割を考えるシンポジウムが15日、仙台市宮城野区の東北福祉大仙台駅東口キャンパスであった。宮城県内の伝承者や研究者ら5人が登壇し、非日常の「ハレの日」が日常を取り戻すきっかけになると強調した。

南三陸町のバス運転士小野寺翔さん(29)は小学生の頃から、同町

戸倉地区に伝わる「行山流水戸辺鹿子躍」に取り組む。中学2年生で被災した2カ月後、町民が身を寄せる登米市の避難所で踊りを披露した。「涙を流す人もいた。身近だった芸能に再び触れた安心感があったのではないかと振り返った。一般社団法人東日本大震災子ども・若者支援センター(仙台市)の足立智昭代表理事は、能登半島の地震の被災地で支援活動が続け

る。「能登では祭りの伝統を守るために地域に住み続ける被災者もいる。災害後の初期に文化を復興することが、地域社会を維持する基盤となる」と述べた。シンポは同大総合福祉学部が主催し、約30人が参加した。清水冬樹准教授(社会福祉)は「被災地に入った支援者は現地の伝統や文化を理解して維持、再建を助けてほしい」と指摘した。(松村真一郎)



「ハレの日」が復興に果たす役割について語る登壇者